

2026 年 7 月 5 日聖霊降臨後第 6 主日（マタイ 11：25～30）

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。（マタイによる福音書 11 章 28 節）

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。今日の福音書の中でイエス様が語られたこの言葉ですが、一度は耳にしたことがある、という方も多いのではないのでしょうか。実際、教会の掲示板などにも貼られることが多いこの言葉。教会は疲れた人が休むことのできる場所、そのように解釈すれば確かに教会の入り口にふさわしい言葉でしょう。それはまさしく「オアシス」のようなイメージでしょうか。

しかしイエス様は、ただ単にわたしたちを休ませるとだけ伝えたかったのでしょうか。確かに傷つき、疲れ果て、どこにも居場所がない状態で教会に招かれた人には、それでいいと思います。ただイエス様はそのあとに、このような言葉を残されていることも、れっきとした事実なのです。すなわち、「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。この言葉だけを読むと、「休む」ということだけが目的になってしまいましたが、そのあとの「わたしの軛を負う」というのが、実は大切なことなのです。

では「わたしの軛を負う」というのは、どのようなことを指すのでしょうか。そのことを今日は、分かち合っていきたいと思います。

「軛」というのは、牛や馬と荷台をつなぐための木製の器具のことです。たとえば馬車の荷台を二頭の馬が引く場合、その馬と荷台とをつなぐためにまず馬同士を木でつなぎ、そしてそれと荷台とをつなぐというわけです。首にはしっかりと木の杵がはめられるのです。

ではわたしたち、馬や牛になったつもりで少し想像してみましょう。荷物を運ぶために、首に木でできた軛をつけられたあなた。もしその軛が肩に食い込んでしまったらどうでしょうか。痛くて、痛くて、一步も進めないかもしれません。ではもしその軛が、ブカブカでユルユルだったらどうでしょうか。力がうまく入らずに、歩くのすら困難になってしまうかもしれません。

しかし考えてみますと、わたしたちは日常的に、たくさんの軛につながれて生きているのではないのでしょうか。仕事や家庭、様々な人間関係、経済的なこと。わたしたちの歩みを困難にし、肩や首に食い込む重荷を日々感じながら、わたしたちは毎日を生きています。そして「休ませてあげよう」という言葉に招かれて、イエス様の元に来るのです。けれどもイエス様はそのときに、「あなたの軛を無くしてあげよう」とは言われていないのです。そうではなく、「あなたを苦しめるその軛に代えて、わたしの軛を負いなさい」と言われているのです。

「イエス様の軛」、それはどういう物でしょうか。「わたしの軛は負いやすく」と、イエス様は言われています。負いやすい軛とは、あなたの首になめらかにフィットして、擦れて首を痛めることもなく、荷物を運ぶのに適したオーダーメイドの軛です。イエス様はそのような軛を、わたしたち一人ひとりに与えてくださるのです。そのような軛を造るということは、当然イエス様はわたしたち一人ひとりのことをよくご存じだということです。

そしてわたしたちに与えられているメッセージは、これだけではありません。先ほどの馬車や牛車を思い浮かべてみると、二頭が横に並んで荷台を引いていることに気づかされます。あなたはたった一人で荷物を運ぶのではないのです。

もうずいぶん前に書かれた、竹内謙太郎司祭の「教会に聞く」という書籍があります。昨年9月、「現在堅信受領者の数について」という話をする中で、この本に書かれた「信徒の心得」という箇所を引用しました。もう一度そこを読んでみたいと思います。

1. 毎日、規則的に聖書を読みましょう。
2. 毎日、規則的に祈りましょう。
3. 主日礼拝に規則的に参加しましょう。
4. 献金を熱心に致しましょう。
5. 悔い改めの業を実行しましょう。

信徒とは何か、ということが語られるとき、信徒はただの休息者、傍観者であってはダメだよ、と先生は言われたかった。そしてそれは、イエス様が軛を除くのではなく、「あなたの軛を与える」と言われていることと共通しているように思えるのです。

日々聖書を読み、祈る。そして礼拝に参加する。物理的に難しいこともあるでしょう。でも便利な世の中になりました。ご家庭でもYouTubeや、週報に挟まれる説教要旨を用いて、み言葉に聞くことができます。

そしてここが一番肝心なのですが、それらの信仰生活をわたしたちは、決して一人でおこなうのではないということです。イエス様が今日の箇所です。「わたしの軛は負いやすく」と言われた後に、このように言われました。「わたしの荷は軽いからである」。

先ほどわたしは、馬車や牛車では二頭が横に並んで荷台を引

いているということをお話ししました。そしてこのように言いました。「あなたはたった一人で荷物を運ぶのではないのです」と。

では一人ではないとすれば、そのパートナーとは誰でしょうか。もうお分かりだと思います。イエス様が共に歩み、その荷台にある重荷と一緒に運んでくださる。そう約束されているのです。

先ほどの「信徒の心得」ですが、こういう話をすると耳が痛いという方もおられます。それどころか「牧師がまたこんなこと言った」と言われる方もおられます。でも先ほども言いましたように、これを一人で頑張りなさいということではないのです。

教会がその信徒に負えない軛を与えようとしているのではありません。信徒としてイエス様と共に自分の軛を負う中で、イエス様が進まれる方に一緒に歩いていく。疲れた時にはイエス様が支えてくれ、重荷に耐えられないときにはイエス様が1.5倍の、いやそれ以上の力で引っ張ってくださる。

その中で、じゃあわたしたちはどのように歩いていくのか。それがとても大切なことなのではないでしょうか。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。

そして、「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。

このイエス様のみ言葉を心に留め、それぞれの荷を負い、歩んでまいりましょう。イエス様と共に。